

ふたひやくふたじゅうふたばん

平塚和夫

いくつかの都市で電話による天気予報の自動応答が行われている。受話器をはずしてダイヤルを廻せば自動的に天気予報が聴こえて来るという具合である。

現在行われているのは次の各都市。

	呼出番号	開始年日	担当気象官署
東京	222	1954 9 1	中央気象台
名古屋	501	" 11 3	名古屋地方気象台
大阪	222	" 11 15	大阪管区気象台
京都	288	" 12 1	京都測候所
神戸	499	" 12 1	神戸海洋気象台

なお、東京の分には市川、船橋、川口、武蔵野が4月から含まれたという。また仙台、横浜、札幌、富山、岐阜、静岡も準備中といわれる。

これはすべて電々公社とタイアップして行われているもので、通話料は度敷料だけ拂う。電々公社では予報サービスと称しているようで、公社でこのサービスを始めるようになった経過については、この自動応答方式の研究考案者である茂垣春洋氏（関東電気通信局保全部傳送無線課）が、昨年暮発行の「電信電話」6巻12号（電々公社宣傳課編集）誌上に『予報サービス物語』と題して克明に執筆されているが、気象台側としての経過を私の知るかぎりで記しておきたい。

222の草分け時代（53年4月）

話はひとまずおとし（1953）にさかのぼる。

その頃東京の天気相談所の2本の外線電話は朝から晩まで鳴りつづけ、加えて1本の内線電話も同じありさまの凄まじさ、相談所ばかりではない、各現業の電話へものべつまくなし、中央気象台の電話交換室は、次から次へと休みなくかかって来る予報の照会電話でこれもやっばりクタクタ、かかって来る電話で始終ふさがるから台内から外部への発信も不可能、交換台でさばき切れなから予報課の事務室の内線電話にもあふれて来る始末、眞面目に電話

に出てたら、天気図を見に行く時間もなければ、飯食う暇も便所に行く暇もない。ことほど左様に天気予報を知りたい要望は強く大きい。それにひきかえ、こちらは1949年の行政整理以来人員の減らされたままな

のは御多分に洩れないし、その頃よりも電話は激増しているという矛盾、こんな調子だから、都民の方でも気象台の電話はしよっちゅ

う「お話中」で困るし、指先が痛くなるほどダイヤルを廻しつづけて午前中いっぱいだって天気相談所にはかからないで迷惑するという按配であった。雨でも降ろうものならそれこそ殺人的な電話の洪水である。想い出すとゾーッとする。

その頃予報課で会議記録用としてポータブルのレコーダーを買った、1954年の4月28日午後、俄雨の降った日、俄雨は15時頃降って一度やんだ、しかし16時頃また降り出した。オフィスの帰りを控えての俄雨で例により電話のラッシュ、予報課の榎本巖技官がテープレコーダーを持ち出してテープを輪にしたのへ吹込んでぐるぐる廻し、内線の受話器をはずしてレコーダーのスピーカーの前においた、「この雨は俄雨で間もなくやみましよう」という予報文は交換室に流れ、かかって来た電話はそれにつながれた。雨は17時30分頃やんだ。

これが気象台として録音応答の草分けとなるわけであるが、5月にはいって今度はレコーダーを天気相談所に持ちこみ、会議がなく器械のあいているときは常時テープを廻すことにし、回線を内線に結着して音をそのまま交換室に送りこんで、自動応答のテストを始めた。榎本技官は増幅その他いろいろと骨折った。外からかかって来た照会を交換嬢がすぐにそれにつなぐというやり方であ

るが、面白がって何時までも聴いていられると困るので吹込む予報文の末尾に「くり返して申し上げますがお判りになりましたらお電話をお切り下さい」とつけ加える智慧は交換嬢の中から生まれて来た。

6月2日朝刊の朝日新聞青鉛筆欄にこのことが紹介され、次のように報じられた。

▶雨の心配が多くなったきよらこのごろ、中央気象台へ天気の間合せがしきり、朝から晩までのべつに電話がかかって来るので、仕事に手につかぬと悲鳴をあげた職員たち、1日の“気象の日”を期して交換台にテープ・レコーダーをすえつけた。

▶「モシモシあすのお天気は？」とくればかねて吹込みの録音版に直結、いちいち答える必要がなくなったかわり、きく方は「北のち南の風、晴れたり曇ったり」の繰返しでとりつくシマもなし。

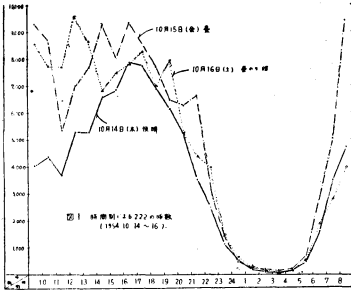
▶「もっと突こんだ話が聞きたいんだッ！」の不満組は天気相談所の直通が引受け、相手の“お天気”も考えながら応待することとなった。

これは大変に具合がよかったが何分にもこれでは極めてお粗末、飽くまでも暫定的であり、1日も早くこれが正規のものとして取りあげられて欲しいというのは、天気相談所、交換室、現業室などの一致した熱望であった。

(25)99391—2の頃(54.2.16 後)

やがて昨年1月、地震課末広技官が友人茂垣氏を電信課の森技官に紹介した。自動応答方式の実験を希望する茂垣さんと予報応答の実験を希望していた森さんとの努力で段階は一步進められ、2月16日から気象台側からテープ・レコーダーに吹込んだ予報文を送り、電々側がそれを電話線に流しこむテストが開始された。

レコーダーは電信課施設係の現業室におかれ、予報文の編集作成と録音は天気相談所が担当した。そしてそれを聴くためのテスト用として2回線、25局の99391（電々公社用）と99392番（気象台用）という7数字の番号が当てられた。この番号は



厳秘にされていたが、何時とはなしに洩れてあちこちで使われるためしばしばテストが妨害されて困ったものである。

(23) 6666 (54, 9, 1) 25 回線

この間、中央气象台と電々公社とで何回か打合せが行われたようで、いよいよ9月1日から正式に一般公開となった。23局の6666番のダイヤルを廻せば何時でも都内どこからでも電信課施設係現業にあるレコーダーの音が聴けるようになり、懸案は成就した。24時間中音を流すというので、昼は天気相談所、夜は予報当番が予報文を編集作成した。

ところが、採算の問題かどうか知らないが電々側は僅か25回線しかこれに廻さなかったため、大きわざとなってしまった。私が9月3日の夕刻、113番(故障担当)のS係官に電話で直接聞いたところでは、

「とにかく天気予報というのはよくかかりますなあ。昨日(開始2日目)は1日で1万4千回かかりましたよ。25回線でしょう、それに殺倒するんですからね、そりやア見ていて凄まじいですよ。仕方がなくて23, 24, 33局の6600番台の空いてる線を全部天気予報に廻して回線を増やしたところが今度はとたんに誤接が多くなって、それらの局の6600台の加入者の殆どから苦情が舞いこんで来る始末でしてね、しかも何しろオーバーになるもんですからね、5分か10分に1回づつヒューズがすぼんすぼんフツ飛んちまうんですから、やり切れません、」

ということであった、このことは9月4日朝刊の日本経済新聞窓欄にも報じられた。局では手にヒューズを持って待ちかまえているという傳説がこの時生まれた。

こうして出発早々大変な好評で、

折から南岸に停滞した前線による悪天候と相まってスタートは好調だった。まして13号、12号、14号とキビスを接して襲来する台風の前に遂に(23)6666僅か25回線は大混乱に陥り、このことは25回線ぼっちでは駄目という結論を生んだ。

222 (54, 9, 22以後) 300 回線

9月17日電々東京管理局は、中央气象台、電々本社、関東電気通信局管内60数名に及ぶ大会議を召集し、一挙に回線数を300に増設を決意、9月22日を期して呼出番号も222と3数字に改めることとなった。この間東京管理局各部門、丸の内、千代田、中調、工事事務所、東京中継所等関係機関の努力は誠に偉大なものであったといわれる(この部分上記「電信電話」による)。

300回線の222は、生まれて早々の15号台風に出会って25日から26日にかけては、1日に11万から13万もかかって各方面をおどろかせた。

これはその後も変わらず、平均1日に8万から10万、天気の良いときや週末などには17万くらいもかかるということである。それらの詳細な数字は東京管理局で調査して毎月印刷されているが、現在のところ气象台の方にはよく知らせてもらえずに居るのは残念なことである。図1のように通話数の日変化などきわめて妙味のあるものであるし、また通話数の天候や旺日による変動(図2)は吹込文を担当するわれわれとしてはこの上ない有益不可欠な資料の筈である。222で聴かせっぱなしのあてがいぶちのわれわれは、聴く人々の反応をこういう資料で知っていたいものである。ノレンに腕おしはよくない。

今でもなかなかかかりにくいことのある222であるがそれも昔の天気相談所とはくらべものにはならない。气象台としては予報のサービスが格段と進んだわけである。また街頭宣傳塔のアナウンスの中には222を聴いて書きとったものをそのまま各商店の宣傳のあい間のスポットに利用しているものもあるが、うまいことを考えたものだ。222は气象台と市民をつなぐ新しい橋とい

えよう。

なお別に聞いた話だと、数年前テープ・レコーダーを作り出したあるメーカーがそれを予報の応答に利用したらどうかと持ちこんだことがあり、气象台としてもその頃から録音による予報応答を実現させたいものといういろいろ努力して来ていたということであるから、ほんとに懸案成就というところかも知れない。

222 予報の実情

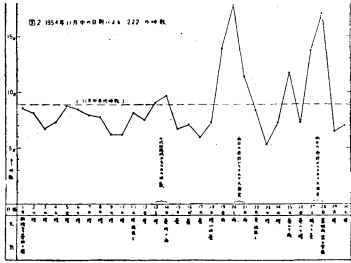
他のことは知らないで東京の知っていることを極く大ざっぱにわれわれの側のことについて書く。

1 体制の不備。222予報のためには、24時間中天気と首っ引きでないはず。天気が変われば予報が変わらねばならないわけで、現在の天気と食いちがう予報文が流れているのではまるで用をなさないから、あらかじめ定められた約束の時刻のたびに発表して行けば用の足りる新聞やラジオ用の予報とは性質のちがうものである。臨機応変機敏な体制が必要であり、天気の急変に応じて即座に判断することが大切といえよう。

そういう仕事が増えたわけである。仕事が増えたらそれに応じた体制を整えないと仕事が行きにくいのは常識である。气象台はこういう点の動作がなかなか緩慢なので実際に仕事する場では困る。一番さしつかえのあるのは人手不足で、222の予報文の編集作成は相当な仕事であることはやってみればすぐ判る。

どうしても体制が間に合わないからということでもあまりにも便宜的なやり方をするのは、一時的には許されても、それでよいのだというようにルーチン化してしまっはよくない。少なくとも現状を守らないことには逆行のソシリをまぬがられられないだろう。そして前向きを考えながら現在を処理しなければ、必ずや将来に禍根となるに違いない。

それから器械がまずいからおいそれと簡単な録音では済まないし、器械の保守修理の仕事も増えたわけである。録音室もないからいろいろ不便至極のありさま等々言えぱりはないが、これも創設期の悩みで、やがては消えるものと思いたいものである。



2 認認の足らなさがうかがえる。残念である。予報をいろいろな方法でより多数の人々に伝えることに本腰をいれるのは気象台の重要な本務である。決して片手間ではない。222 もそういう性質の仕事なのである。

ここで予報の傳達で例をあげれば、台風の時であろう。大半の人々がラジオで刻々と知る、新聞は少々時間がずれる（新聞ラジオの情報については7号に大野義輝氏が書かれている）。しかし台風時の緊急停電とか台風のための故障停電となればそのラジオも聴けなくなる。そのときは気象台に電話すればよいと言うだろう。だが、どこの誰でもがすぐに電話かけられるほどの町村にも測候所があるわけではないし、測候所にもその応答人員は皆無、それに家庭に電話を持つ人など全体から見れば少数である。つまり多くの国民が迫り来る台風の前に、災害の恐怖の前に暗黒の中に放置されるのである。これを解決するため台風12号の情報を市民に伝えてパトロールしていた大宮消防署の自動車が列車にひきずられて死者を生んだ悲惨事はまだ記憶に生々しい。このように予報の傳達というのは大変な仕事の筈なのである。気象台はこれをゆめゆめおろそかには出来ないのであって、222方式は特に昼夜人々が仕事に従事している時間において有力な傳達手段である。

222が新聞ラジオと本質的にちがう大事なことがらは222を利用する人々は天気予報によって自分の当日なり翌日なり、はたまた数日後の計画を律しようとするためにこれを利用するのであるから、意識的にしろ無意識的にしろ気象台の存在をより高く評価している人たちである。これらの人々の間で中央気象台のサーヴィス面に対して予報の当りはずれ

は別として不信を買うようになれば、それこそ危機に直面すると言っても言いすぎではなからうと思う。とにかくわざわざ電話で直接天気予報を聴こうと努める人たちのなのであって、新聞やラジオで知らず知らずのうちに天気予報を聴き知る人たちとはまるでちがう大事なお客さんでもあるといえよう。

222方式を始めたということは、単に問い合わせが殺倒るからそれを機械化したまでで、それによって人員が浮かぶと考えるのはトンデモナイ無茶な話で、今の世の中は新聞とラジオで予報を知らせる時代は過ぎ、電話をも使う時代となったのである。電話は補助的な傳達手段ではなく、近い将来には必ずや主要な傳達手段となるものと見通される。今までの電話の考えでは1対1の話し合いであって、殆ど公共性ということでは言えなかったかも知れなかったが、1日平均10万通もの利用状況ではもはやすぐれた公共性を持って来たと言わざるを得ないのである。

一例をあげれば、この冬は222予報文にスポットとして季節にはいる頃から水道や井戸水の凍結防止について注意を喚起したが、1日10万の人が聴き10回やったとすればまさに全都民の8分の1にもぼる延人数が暮しの水凍結の注意を直接喚起されたことになるわけで、影響の大きく公共性すぐれた222ではあるまいか。

222のために直接の電話応答が減ったからよいだろう人手不足の筈はない、という言葉の中にはモノを知らない匂いがする。直接の電話応答の多いことを殆ど考慮に出来ない人員でやっていた昔のことは、ちっともお話の標準にはならないし、電話応答だけが仕事ではないのである。

3 基本協定とその諒解事項の実施不徹底。中央気象台長と電々公社総裁間の基本協定、本台総務部長と電々営業局長間の諒解事項が54.12.27付で定められているが（中央気象台日報55.2.9付掲載）、器材提供の不円滑、テストのための無料電話設置のないこと等々いろいろと実際面で徹底を欠いているうらみもなしとししない。

たとえばレコーダーで、ポータブルのを毎日毎日ひきもきらず24時間中廻しっぱなしではや1年、今では3台ほどあるがそれも昨年9月から7カ月経ってはおわかりいただけでしょう。どれもみな相当老衰して音もよくひびき、すぐに疲れて息切れしてしまってエンコする。3月12日公社から再生器の新品（アナウンスマシーン）がとどけられたが、吹込みの方はやはり従来のポータブルでやらねばならず、手間を食うことおびたしい。しかもこのアナウンスマシーン、これがまたメーカーが連日の24時間運転にはまだ自信がないという代物で、この取扱いで電信課はいろいろ苦勞しており、この新器械の将来性は今のところまだまだであるが、若し改良されても、吹込みと再生が別の器械であるうちはダメである。実用にはならない。

また別に私の言いたいことは、今後この種の協定などを結ぶ際には実際に現場で仕事にたずさわっている人々の意見を十分に聴いてからにしてみらわないと、まずい点に気付かないというまずさを犯すことになるということである。何時もことあるごとに強調されるが、このことは現在の気象台運営上の重要な欠点である。

4 新聞が覗いた222。今年1月7日の朝日新聞都内版は

『予報電話の明暗2すじ

もうけは年に2億一電々公社
お天気相談所一くたびれ
切った設備』

と4段ぬきで報じたが、その紙面にいわく「はじめは損を覚悟でイヤイヤ乗り出した電々公社も、時あたかも台風シーズン、洞爺丸や相模湖惨事でこの便利な“電話予報”は大当り、最高時には1日にナント17万回も利用され、この好天続きのお正月でも毎日9万回という好成績、おかげで年間2億円の電話料が“ヌレ手にアワ”と転りこむ勘定と分って大張り切りだ、これに引きかえてあわれなのは予報提供側の気象台のお天気相談所、“予報電話”に流す録音設備も公社側ではロクロク準備してくれず、すり切れた録音テープの補充すらしてくれない……と嘆いて

いる。」「この電話に予報を吹込むのはお天気相談所の役目、朝から夜まで1日最低5回、荒れ時となると10数回も予報が変る度に新しく録音する、この録音設備なるものが、きわめてお粗末だ、気象台の電信室のシミで宿直ベッドなど同居したタナの上に、古いポータブルの器械がおかれている。右手でカネを合間にたたきながらの録音である。—(中略)—この設備は予報電話開始時に試験的においたまま公社側はホッタラカシ、録音テープがすり切れるとテープ会社に頼んで寄附してもらわねばならず、故障も気象台員が仕方なく修理している。」

むすび

以上由来めいたものを冗舌につらねたが、222は多数の電々、気象台の技術者の手によって日夜遂行されており、今後ますます発展強化されるべきものである。願わくは現状の欠陥が1日も早く除かれて、公共サービスとしての面目をいやが上にも發揮するように努めていきたいし、そう運営して欲しいものである。なお222は将来1177番として全国統一番号になる予定ととき。

またニューヨークでは、電話予報が1日7万、電話時報が1日6万3千平均の呼数だということである。

(中央気象台予報課天気相談所)

(19頁よりつづく)

云えない。具体的な研究はどこまでも実際の観測成績及び研究論文から生れるものであろう。それにもかかわらず、この試みは我々太陽活動コロキウムのメンバーが之までを回顧し今後に資する上に非常に重大な役割を演じていることは認めざるを得ない。

ここにアンケートにつきころよく回答を寄せられた数多くの方々並びに熱心に討論に参加下さった方々に心から感謝の意を表するものであります。

(気象研究所 関原記)

書 評

動 気 候 学 高橋浩一郎著 岩波書店
昭和30年3月, A5—321頁, ¥850円

いわゆる綜観気候学 (synoptic climatology) に対して動気候学あるいは力学的気候学 (Dynamische Klimatologie) がある。体系的には1930年頃ベルシェロンによってはじめられたものであるが、日本では主として高橋博士が研究され、多くの労作が戦前の気象集誌に発表されている。最近長期予報や電源開発などに関連してこの方面の研究が多くの注目を浴びてきたが、まとまった著書とてなく、久しく要望されていた。

さて第1章は天候の変動の諸性質を多くの資料によって説明してある。第2章では世界の気候という題で主として理論的な面から気候を扱う糸ぐちをつけてある。第3章では日本の気候の一般論を述べ、ついで第4章から第9章まで各季節の日本の動気候を説明してあり、ここはまさに著者の独壇場である。第10章は天候の変動の原因となりうる要因をすべてあげかんたんに説明してある。

本書の特徴の第1は著者の深い経験があらゆる面に、にじみでていることである。これは気象学者であり、且つ気象技術者である筆者にしてはじめてなしうるものである。第2にあるかたよった立場をもっていないから、あらゆる問題とあらゆる方法が提示されており、本書一冊で足りるということ是最も有難い点である。第3に、読者はこの本の中から無限に多くの研究課題を直ちに摺みとることができるということを強調する必要がある。同時に、ここにかかっているどの1つの理論、あるいは記述も完全無欠なものとして、信じ、理解しようと努めるならば数ページにして坐折するにちがいない。だから

何はさておき読者は買ったらすぐ最後のページまであさりよみ通すことがのぞましい。その上で手元から放さず常に「使らう」ことが必要である。

ともかく動気候学のまとまった本として世界最初のものであるを注意したい。

(渡辺次雄)

寺田 寅彦の生涯 太田文平著 新書版 238頁
昭和30年3月 四季社刊 150円

この書物は寅彦の生前に氏と一面識もなかった一人の愛読者によって書かれた異色のものである。著者は高商出身のビジネスマンである。寅彦の門弟の矢島祐利氏の傳記は、書翰、日記、手帳、隨筆、科学的業績などによって書いた「編集せる自傳」であるが、太田氏のは主に寅彦の隨筆にあらわれた回顧的名文によってつづられた、やはり自傳風のものである。矢島氏のものより幾分偶像化され、美化されているのは用いられた材料によるためであらう。

内容は小宮豊隆氏の序、自作品に現われた寺田寅彦の生涯—12章よりなり、本書の大部分をしめる一、寺田寅彦の装幀観、寅彦をめぐる人々と私、よりなる。

寅彦は多方面に大きな影響を与えた割合にあまり調べられ、評価されたものが少いのであるが、これは寅彦が多方面にわたる天才であり、独想の人であったために、その評価が容易でないからであらう。この書物をよまれ、寅彦に対する興味をさらに深めて、再び全集をよみかえしてみるならば、寅彦の精神がわれわれのまわりに現存する多くの門弟たちにどのようにうつがられているか、また道にどのように弟子たちによってゆがめられているか、本物とエピソードがどんなにちがうものであるか思いを新たにすることであらう。

(根本)